

目をつぶった瞬間に

目をつぶった瞬間に
透き通る水面（みなも）が広がる
絵でしか みたことないところ
緑輝く御射鹿池（みしゃかいけ）が

忘れかけていた頃に
映し出される心象風景
本当に歩いている
右から左 白い馬が

どうしてこんな色してるのか
この世のものと思えない色
息を呑むような美しさ
明るい緑 暗い緑

再び目をとじたとき
緑の色が青に変わる
幻想的な景色が
怖いほどに背中振るわす

ふとした瞬間に
映し出される心象風景
明るかった空の色が
暗い紺に変わっていた

どうしてこんな色してるのか
この世のものと思えない色
思わず逃げてしまいたくなる
暗い中に青く燃えてる

鯉のぼり

清里の道の駅で数百匹の鯉のぼり
山間をつなぐ空この季節の名物に

今年もたくさんの車
奥の方までそっと走り
停めれるところ見つけて
やっと外に出れた

北杜の散策 小諸に向かう途中
いつも通りすがりの楽しみ
去年はコロナでやってなかった
当たり前のものない寂しさ

ケーブルカーに乗ったら
どんな景色見えるのだろう
いつかは行けるものと
思いながらまだ乗れずに

今回も時間なくて
頂までは行けなかった
麓のレストランで
おきまりのカレーすくう

大きな池のそばに腰掛け
水鳥眺めるひととき
本物の鯉が泳ぐそばで
お互い身を寄せ合うカモたち

少しあぶない四角形

今日は極秘で呼び出してごめんね
どうしても伝えておきたいことがある
お互いのパートナー誤解晴らすために
ひとつ間違えるととんでもないことに

あなたが言うまでそんなことが
起こっているなんて気づきもしなかった
正直なところそこまで白黒
つけることが本当にいいのかな

あまり僕のことを言うのは良くない
優しい彼だけど気にしてる気がする
他の男の人をとやかく言うのは
おそらくきっと面白くないだろう

そんなにあなたのこと言ってるつもりない
でも少しだけ意識してみるわ
だけど突然言わなくなるのは
かえっておかしいと思われる気がする

それから僕の方も疑われてる気がする
あまりに馴れ馴れしく君に接しすぎた
そのせいか彼女は僕が君のことを
本当は好きだと思っているらしい

だけど彼女に私の方から
何かを持ちかけることはできない
あなたが本当に彼女のことを
思っているのならいつか伝わるはず

冷静なきみと話しているうちに
自分のこともわからなくなってきた

ツツジ咲く小道で

ツツジ咲く小道の中で 小さな手を引いて
ゆっくりと進んだこの景色
何年ぶりにみただろう

今はただ大人ばかりで 通り過ぎるだけの
短い間にチラリと観賞
それも仕方ないのかな

思い出すよあの頃 石のベンチに腰掛け
おにぎりに巻かれた
アルミホイールめくって

小さな持ち手ついた 蓋付きのコップの
ストローくわえる 幼い我が子がいた

乳母車 降りた 嬉しさいっぱい抱いて
乾いた土の上 ゆっくり過ごしていた

20年近くすぎ 人は変わってしまっても
この緑の景色は 変わらない懐かしさ

廃線じきの道すぎたら コマチソウの畦道
ツツジに似たような色して
目を楽しませてくれる

そういえば故郷近くに
同じようなところあって
自転車で走りすぎたところで
祖母の家にたどり着く

白い運動靴 裏の赤い白帽
チェーンの油で 黒く汚れたジーンズ

石を避けられないで 時折転んだ
タイヤガードの歪みを
見つめながら走った

自転車 降りた 疲れを癒すように
乾いた道の上 ゆっくり歩いていた

50年近くすぎ 人は変わってしまっても
この緑の景色は 変わらない懐かしさ

緑の雨

新緑の季節にきらりと
深い森の中光る
雨粒なのか陽射しなのか

雨の後の薄日の中
色も揃って鮮やかに
全てが綺麗に洗われて
青葉いきいきと輝いて

あの時思い出す
こんな森の中で
二人で一列に
狭いところ歩いた

移りゆく季節の中で
新しい気持ちにさせてくれる
艶やかな青葉見つめる

雨の後の薄日の中
自然の魔法にあやかって
全てを美しい思い出に
青葉一段と輝いて

あの時と同じように
空は晴れていたのに
緑に残る
しずく避ける傘ささして

ウスバシロチョウ求めて

漬れた目玉焼きに
炒めたソーセージのせて
コンビニで買って来た
カット野菜も添えて

今日は北杜の村に
息子と二人で
ウスバシロチョウ求めて
早起きトースト朝食

今年も性懲りも無く
去年と同じように

五月初めなのに
夏のような空に
乾いた道映る影
黒くくっきり小さくて

赤紫の野の花
名前なんていうんだろう
緑のトンネルの手前
ひなたの畦道に

舗装もしてないこの道
なんて懐かしいんだろう
時々ある水たまり
わざと踏みつけてゆく

目の前で小鳥の羽ばたき
飛んでいるチョウと間違える

キアゲハにつられながら
ついたところの草陰に
きらり光る羽を見た
さながら小さなステンドグラス

新しい気持ちで

ある晴れた朝 庭木の上
見上げる空 若葉揺れる

昨日まで吹いていた
冷たい風すっかりなく
カーデーガン脱いだ
袖の隙間 そよ風感じ

新しい気持ちで
昨日までのことは
もうすぎたことだと
いいことだけ残し

陽の光浴び 一瞬ずつに
きらりひかる 若葉たちよ

いつから生まれたのか
常緑の中 新入りのように
古い緑たちに見守られるように
茎も明るく

新しい気持ちで
始まる今日から
これからのことだけ
考えてゆきたい

新緑の季節に
思いを込めて
移り変わる日々に
見失わないように